

# たんにしょう 『歎異抄』のおはなし⑤第三条

今回は、有名な「<sup>あくにんしょうき</sup>悪人正機」のお話です。これはある意味『歎異抄』を象徴する言葉であり、日本の思想史上でも、最も有名な一文といえるでしょう。

「<sup>ぜんにん</sup>善人なをもて<sup>おうじょう</sup>往生をとぐ、いはんや<sup>あくにん</sup>悪人をや。」

「善人」というのは自分の力のみを頼りにして厳しい修行をしたり、自力で善を修める人で、寺や仏像を造ったり写経や供養などの善行をして悟りを求める人のことです。

「なをもて」は、～でさえも、～までも、という意味です。

「もて」は、「もって」のことです。当時は、<sup>そくおん</sup>促音（つまる音の、小さい《っ》）は発音されても文字に書き表しませんでした。この後も、「もとも」「よて」という言葉が、この第三条に出てきますが、どれも促音が省略されています。

「いはんや」というのは、まして、いうまでもなく、という意味です。

「悪人」は、<sup>ぼんのう</sup>煩惱をそなえた衆生のことですが、ここでは自分の力では迷いを離れることのできない人ということです。

現代語訳は、以下の通りです。

〈善人でさえ浄土に往生することができるのです。まして悪人が往生できないはずはありません。〉

ちょっと衝撃的で、世間の常識を破るような言葉が、いきなり最初から出てまいります。善人よりも悪人の方が優先的に救われるというのです。

これまでの仏教では、悪をやめて善を修める「<sup>はいあくしゅぜん</sup>廃悪修善」や、善い行いに努めなくてはならないという「<sup>けんぜんしょうじん</sup>賢善精進」が説かれてきましたから、「悪人正機」はそれを否定するようなものです。

もしこれが一般の人に誤って受け入れられたら、悪人の方が救われるのだからと、わざと悪いことをする人が出てくることでしょう。

そのような安易な受け取り方は、『歎異抄』の著者である<sup>ゆいえん</sup>唯円が歎いていることのひとつである、「<sup>あくむげしゅぎ</sup>悪無碍主義」（どんな悪いことをしても往生の<sup>さまた</sup>妨げにならない）や「本願ぼこり」になります。「本願ぼこり」という言葉は『歎異抄』第十三条に出てまいります。本願に<sup>ほこ</sup>誇るということで、悪いことをする方が救われるという、教えを曲解した信仰のことを言います。

阿弥陀仏の慈悲に甘えて、悪い事をして生活するという問題も『歎異抄』の主題のひとつです。

人間社会の規則を無視するような考え方は、法然上人の時代にもありました。

このため専修念仏が取り締まりの対象になってしまい、比叡山や奈良の既成仏教教団の人々が、法然はけしからんと朝廷に訴えたこともありました。

ここでいう「善人」は、自力で修めた「善」によって往生しようとする人のことです。

仏様にすべてをおまかせしようという「他力」の心が希薄なので、自分の修行や善い行いなど、すべて自分のはからいによって往生できると思っています。

自分自身のことがよく見えておらず、自分の中にあるおご驕りに気づいていないのです。

しかしそのような人であっても、仏さまは救ってくださるのです。

「悪人」というのは、「煩惱具足」の私たちのことです。

あらゆる煩惱をそなえている私たちは、自分の力でどのような厳しい修行を積んでも、自力では迷いの世界から離れられません。

また罪悪には三つの層があると言われ、①警察などのお世話になるような、法律に違反する罪、②警察に捕まることはないけれども、倫理道徳や社会通念に反する罪と、もうひとつは③宗教的な罪というのがあるともいわれます。

宗教上の善悪は、人間が決めた基準によるのではなく、如来の視点から善悪を論じるのです。

自分自身を深くかえり省みれば、どんな人も仏様に対して 100%完璧な善人であるとはいえ、誰にも必ずそれなりの欠点があります。

このような自覚が深まると、悪人というのは自分の行いについて言うのではなく、自己の存在それ自体が仏様の願いに反していることが知られてきます。

ですから善人というのは、その人がただ自分で善いと思い込んで、思い上がっているにすぎないということになります。

このようなところから、如来の救済は、そのような善行ができない悪人を対象とするのです。

「しかるを世のよひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。」

(現代語訳)

〈ところが世間の人には普通、「悪人でさえ往生できるのだから、まして善人が往生できるのはいくらまでもない」と言います。〉

次に、ここでは世間一般で行われている考えや常識が述べられます。

一般的には、この「悪人でさえ往生するのだから、まして善人はいくらまでもない」という方が、理

屈が通るように思われます。

しかしこれはあくまでも世俗の論理であり、宗教的な観点は、実は違うのです。

## ◎親鸞聖人は、なぜこのように逆説的なことを言われたのか？

「この条、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。」

「条」というのは、教条、教えのくだり、という意味です。

「一旦」は、一応、ひととおり、ということです。

「いはれ」は、しかるべき理由のことです。

「本願他力」ですが、阿弥陀仏のお誓いすなわち本願によるお救いのことです。すべての人を必ず救って幸せにするというお誓いが本願で、他力とは阿弥陀如来のお力です。

「意趣」は、趣旨、いわれ、考え、という意味です。

現代語訳は、以下の通りです。

〈この考え方は一応もったもなようですが、阿弥陀如来の誓いによるお救いの趣旨に背いています。〉

この世間の常識は、一応その理由はそれなりにあるように思われますけれども、実は阿弥陀仏の本願他力の教えが意味するところには背いているということです。

『歎異抄』で親鸞聖人が語るのは、信仰のパラドックスといいますか、逆説ともいえるでしょう。倫理や道徳の立場から見ると、善は悪よりも価値が上になりますから、善人が悪人よりも極楽へ行く可能性が高いと思うのは、常識でしょう。

しかし親鸞聖人は、その常識を否定されて、悪人の方が善人よりもはるかに救済の可能性が高いというのです。

阿弥陀如来の本願による救いの趣旨、すなわち善悪どのような人であっても本願を信じてお念仏を称え、如来におまかせする人を救うというお誓いのいわれに、世間の常識は背いているのです。

この逆説、パラドックスの中に、信仰の本質に関する秘密があると思われます。

## ◎自力の人は、なぜ阿弥陀仏の本願に救われないのか？

「そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむころかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。」

「自力作善のひと」というのは、自分の力で厳しい修行、すなわち滝に打たれたり火の上を歩いたり座禅を組んだりといったことをしたり、写経をしたり寄進や布施をしたり仏像や塔や寺院を造っ

たりという善い事をして浄土に生まれようとする人のことです。

「たのむ」は、あてにする、頼りに思う、全面的に信頼して身をゆだねる、という意味です。

「あひだ」は、ここでは、…ので、…がゆえに、という意味です。

「弥陀の本願」というのは、阿弥陀如来の本願にかなった、救いにふさわしい人という意味です。

現代語訳は、次のようになります。

〈なぜなら、自力で修めた善によって往生しようとする人は、ひとすじに本願のはたらきにおまかせする心が欠けているから、阿弥陀仏の本願のお心になっていないのです。〉

自分のしたことを自分の功績として誇っている自力の人は、如来の他力に全面的におまかせする心が欠けているために、弥陀の本願の対象からはずれているというわけです。

自分は善人であり、悪人とは人のことだと思っている人には、この第三条は、なかなか理解できないといわれます。

如来の本願力に身をゆだねることができない自力の人は、阿弥陀如来の救済の対象ではないのです。

## ◎阿弥陀仏の救いが完成するときとは？

「しかれども、自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、<sup>しんじつほうど</sup>真実報土の往生をとぐるなり。」

「ひるがへして」というのは、すてて、心を変えて、改めて、という意味で、つまり<sup>えしん</sup>廻心（<sup>えしん</sup>回心）のことです。

「真実報土」は、阿弥陀仏の本願によって現れた、本当の浄土のことです。

現代語訳は、以下の通りです。

〈しかしそのような人でも、自力にとらわれた心を改めて、阿弥陀如来の本願他力のはたらきにおまかせするなら、真実の浄土に往生することができるのです。〉

悪い事をしている人が、そのまま救われるというわけではありません。

ですから救われるための条件は、悪ではないわけです。

「他力をたのみたてまつる」、すなわち「阿弥陀如来の本願におまかせする」という一点が、救われる要因なのです。

悪いことをしているか、善いことをしているかという善悪を離れて、「他力をたのみたてまつる」

すなわち「阿弥陀如来の本願におまかせする」という一点に、救いの的が絞られています。

親鸞聖人は、如来の目から見ると、自分は煩惱にまみれた罪悪深重の愚か者であるという深い自覚を持っておられました。

しかし煩惱がなくならないということにあぐらをかいて、甘えているわけではありません。

むしろこの「自分は悪人である」という深い自覚から、心をひるがえす一歩が始まります。

外に向かっていた眼が内に向かうと、「悪人」である自分が見えてくるのです。

自力で成仏しようとする心を捨てて、如来の本願力におまかせできるようになるのが「廻心」です。

「自力のころをひるがえす」とは、言い換えれば、自我のとらわれや執着、我執、「私が私が」という思いから離れることです。

「悪人」というのは深い自覚の言葉であって、他人に向かって押し付ける言葉ではありません。

自分のはからいで生きている人には、悪人である、ありのままの自分の姿が見えていません。

その自分の中の「悪」を自覚して、善人という、ある意味で偽善の鎧ぎぜんよろいを着た自分の姿が見えてきた時に初めて、救われるのです。

ですから「他力をたのむ」というのは、煩惱がなくなって立派な人間になることではなく、逆に煩惱だらけの愚かな自分の姿に気づいて、ありのままの自分が見えてくることです。

自分は絶対に正しくて善いという思いを放棄することによって、それまで見えていなかった、傲慢ごうまんな自分のあり方を深く知らされることです。

阿弥陀仏の救いは、自力のころをひるがえして他力をたのむことができるようになったときに初めて、完成するのです。

「真実報土」という言葉が出てきますが、この「真実報土」に対する言葉が「方便仮土ほうべんけど」です。「辺地懈慢へんちけまん」ともいいます。

これは浄土の「かたほとり」のことで、浄土の中ではありますが、片隅、周辺部なのです。

倫理道徳に従い善行に励む人も「方便仮土」に往生できますが、その人には、私はこういう善い事をしたと誇る気持ちや、「私が私が」という自我執着心、自分自身のエゴやうぬぼれが残っていますから、浄土の中にいながら浄土の全体を見ることができないのです。

その自信・自我（エゴ）や我執の気持ちがなくなって、「おまかせする」という心境になったときに、真実報土がおのずから現れてくるのです。

## ◎なぜ悪人が救われるのか

「煩惱具足のわれらは、いづれの行ぎょうにても生死しやうじをはなるることあるべからざるをあはれみたまひて、願がんをおこしたまふ本意ほんい、悪人成仏あくにんじやうぶつのためなれば、他力をたのみたてつる悪人、もとも往生の

しょういん  
正 因 なり。」

「煩惱具足」とは、苦惱くのうの原因である欲や怒り、愚かさ（三毒の煩惱）をすべて身にそなえもっていることです。

「いづれの行」というのは、口で称えるお念仏以外の仏道修行を指します。滝に打たれたり、座禅を組んだり火の上を歩いたりなどといった、厳しい修行です。

「生死しょうじをはなるることあるべからざる」ですが、「生死」というのは、生まれては死に、生まれては死ぬことを繰り返す、果てしなくさまようことです。生死流転しょうじるとん、生死輪廻しょうじりんねのことで、迷いの生涯から抜け出せない苦しみや迷いのことを言います。

「もとも」は、もつとも、まさしく、本当に、まさに、という意味です。ここでもつまる音の促音が省略されています。

「往生の正因」は、極楽浄土に生まれるのに最もふさわしい人のことです。

現代語訳は、以下の通りです。

〈あらゆる煩惱を身にそなえている私たちは、どのような修行をしても迷いの世界を離れることはできません。阿弥陀仏は、それをあわれに思われて本願をおこされたのであり、その本意は私たちのような悪人を救いとして仏にするためなのです。ですから本願のはたらきにおまかせする悪人こそ、まさに浄土に往生させていただくのにはふさわしい人なのです。〉

自己の姿を率直に記したのが、「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざる」という言葉です。

阿弥陀如来の本願は、そのような私たちをあわれに思って起こされたわけです。

『歎異抄』第一条には、「弥陀の本願には老少善悪のひとをえられず、ただ信心を要とすとするべし」という言葉が出てきました。その人が悪人であっても善人であっても、弥陀の本願は、信心さえあれば、そのどちらでも救うというのです。

阿弥陀仏の前においては、世間の価値観である善悪は、関係ありません。

「よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。」

「よて」というのは、よって、それで、それゆえ、という意味です。ここでもまた促音、つまる音が省略されています。

「おほせさふらひき」は、法然上人ほうねんしょうにんが親鸞聖人しんらんしょうにんに話されました、ということです。

現代語訳は、以下の通りになります。

〈それで、善人でさえも往生するのだから、まして悪人が往生できるのはいうまでもないと、法然上人は親鸞聖人に仰せになりました。〉

『歎異抄』のこの条と第十条だけ、最後に「云々」がついておりません。

そこからこの「悪人正機説」は、法然上人が言った言葉なのではないかという説があります。

この第三条は、最後が「おほせさふらひき。」で終わるので、親鸞聖人が「法然上人から教わりました」と語ったために、「云々」がついていないのではないかというのです。

大正時代に醍醐寺三宝院で発見された法然上人の伝記である、醍醐本『法然上人伝記』にも、悪人正機と同じ意味の言葉が見られるそうです。ですから「悪人正機」という言葉は、元々は法然上人が言った言葉であることは、ほぼ間違いないでしょう。

『歎異抄』には、世間一般の社会通念とは違う価値観が示されています。

そしてそこにこそ、宗教の本質や、宗教の存在意義があるのです。

仏さまの目から見れば、どんな人も人間である以上、悪人ということになります。

しかし自分は善人だと思い込んでいる人間の傲慢さ、自分の中にある悪に気づかない自覚が問題なのだと思えます。

浄土教の仏教というのは、ある意味で弱者の救済や、愚者のための仏道であるともいわれます。

弱者や愚者にとっては、自分の中の悪を見つめ、自分は悪人であるという謙虚な自覚をもって如来の救済を信じ、如来に「おまかせする」ということが、悩み苦しき多い人生を生きるための術すべとなるのです。

それでは、今日はこれくらいにしたいと思います。

次回は七月のお盆法要の時に、『歎異抄』第四条を拝読したいと思います。

今度は「慈悲」の話です。

どうもありがとうございました。